



認知能力と非認知能力

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の解除に合わせて、園も久しぶりに再開しました。再開初日の5月14日は、何と全員の子が揃い、お休みゼロ！みんなこの日を待っていたのですね。全員の子と再会できたことを、心から感謝します。今年度は多くの行事が中止や延期を強いられていますが、日々の活動の一つひとつを大事にし、本園の教育・保育目標を目指します。

特に、本園のチャレンジ目標である「考える、決める、やってみる！」を、園児の発達段階にに応じて今年度も日常的・具体的に指導し、園児の主体性を伸ばしていきます。

ノーベル経済学賞を受賞したアメリカ、シカゴ大学のジェームズ・ヘックマン教授率いる研究チームは、ミシガン州の「ペリー幼稚園」の卒園児を40年近く追跡調査したそうです。

すると、幼稚園に毎日通った子どもは、通わなかった子に比べ、IQが著しく伸びたものの、それは一時的で、8歳になる頃にはその違いはほとんど見られなくなったそうです。

ところが、さらなる追跡調査で、幼稚園に通っていた子の方が、そうでない子に比べ、成人した後の人生において、高い確率で充実した生活を実現させていたそうです。その要因は、幼稚園時代の「非認知能力」を育む働きかけにあったと研究チームは結論付けています。

幼児期での読み書き計算といった「認知能力」を伸ばすための働きかけは、小学校高学年になる頃にはその効果がほとんど見られなくなると言います。一方、幼児期における「非認知能力」を育む働きかけは、その子の人生の質に大きく影響するのだそうです。

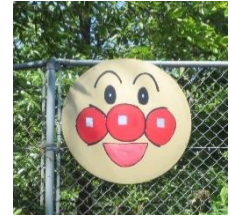
では、「非認知能力」とは一体どんなものなのでしょう。それは、自分で考える力、自分の判断で選び決める力、挑戦してみる力、やり抜く力、仲間と協働する力、我慢する力、困難に立ち向かう力、ダメージをしなやかに受け止める力（レジリエンス）といった、いわゆる数字に表せないけれど、これからの社会で人生を切り拓いていく上での基盤となる資質・能力です。

いくら「認知能力」が高くても、「非認知能力」が育っていなければ、その子は変化の激しい社会で活躍するのは難しいというのが研究チームのまとめです。

はるか昔のことですが、私が小学校で鉄棒の逆上がりを指導していた時、保護者からこんな質問を受けたことがあります。「逆上がりができて、何か将来役に立つのですか？」私が返した言葉はこうです。「できないことが一生懸命努力してできるようになったとき、子どもは大きな自信とすごいパワーを身に付けます。少々のことではへこたれなくなります。たかが逆上がりかもしれませんが、それ以上のご褒美が将来必ず待っているのですから、一緒に応援してください。」

今、世の中は急激に変化しています。日々進化し続けているコンピュータによって、生活スタイルも学習スタイルも、働き方も多様化していきます。今回の新型コロナウイルスを契機に、テレワークが一気に普及し、オンライン学習の導入も一気に加速化してきました。どんどん多様化・国際化する社会において必ず必要になってくるのが、主体性という確かな軸です。あふれるほどの情報に溺れ、流され、自分を見失ってしまってははいけません。

「考える、決める、やってみる！」は、まさに「非認知能力」を育てるものです。幼児期から子ども自身が主体性をもって Try and Error を繰り返し経験することによって、将来的に自分の軸を太くしていったほしいという願いを込め実践しています。 (園長 寺本 明生)



古いカープミラー
が変身しました